

# 傳咸の「七經詩」について

## 一、序

西晉の傳咸には、「七經詩」と呼ばれる儒教の經典を詩題とした一連の四言詩がある。とはいえ、現存するのは、そのうちの六つの經典を詩題としたもので、「孝經詩」「論語詩」「毛詩詩」「周官詩」「周易詩」「左傳詩」がそれである。

これら一連の詩は、明の楊慎が『升庵詩話』卷一「七經詩集句之始」の條で、「晉傳咸作七經詩。……此乃集句詩之始。〔晉の傳咸 七經詩を作る。……此れ乃ち集句詩の始まりなり。〕」と指摘しているように、詩題に示された儒教の經典の中から、それぞれ四字句を、そのままの形で、あるいは若干の改變を加えた形で拾い出し、それらの句を集めて一篇の詩にした、いわゆる集句詩である。

矢 田 博 士

なにゆえ傳咸はこのような詩を作ったのか。本稿では、傳咸が「七經詩」を作るに至った時代的背景、およびその意圖について考えてみたい。

## 二、集句詩と稱されるゆえん

まずは、當該作品について、全ての句の出所を示すことによって、集句詩と稱されるゆえんについて確認してみたい。なお、詩については『先秦漢魏晉南北朝詩』（遼欽立輯校、中華書局）を底本とし、『藝文類聚』卷五十五、『初學記』卷二十一などを参照した。儒教の經典については『十三經注疏』（清・阮元校勘・索引本、中文出版社）を、底本とした。

## 中國詩文論叢 第二十三集

## 其一

立身行道、始於事親、上下無怨、不惡於人、

孝無終始、不離其身、三者備矣 以臨其民。

〔身を立て道を行ふは、親に事ふるに始まる、上下 怨み無くんば、人を惡にくまず、孝は終始と無く、其の身を離れず、三者 備われり、以って其の民に臨む。〕

●立身：「開宗明義章第一」の「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。」による。●始於：「開宗明義章第一」の「夫孝始於事親、中於事君、終於立身。」による。●上下：「開宗明義章第一」の「先王有至德

要道、以順天下。民用和睦、上下無怨。」による。●不

惡：「天子章第二」の「愛親者不敢惡於人。」による。

『藝文類聚』は、「不敢惡人」に作る。●孝無：「庶人

章第六」の「故自天子至庶人、孝無終始。」による。●

不離：「諸侯章第三」の「富貴不離其身。」による。

●三者：「卿大夫章第四」の「非先王之法服、不敢服。

非先王之法言、不敢道。非先王之德行、不敢行。……三

者備矣。……」による。●以臨：「聖治章第九」の

「君子則不然、……德誼可尊、作事可法、……以臨其民。」

による。

《人格を完成させ道德に適った行いをすることを最終の目標とする孝は、親につかえることを始まりとする。身分の上の者と身分の下との者との間に、怨みの情がなければ、人を憎むということはない。終わりと始まりとに關わらず、孝がその身から離れることはない。禮法に適った服と言葉と行いとが備わってこそ、はじめて民に臨み接するのだ。》

## 其二

以孝事君、不離令名、進思盡忠、義則不爭、

匡救其惡、災害不生、孝悌之至、通於神明。

〔孝を以って君に事ふれば、令名を離れず、進みては忠を盡くさんことを思ひ、義なれば則ち争はず、匡ただして其の惡を救へば、災害は生ぜず、孝悌の至りは、神明に通ず。〕

●以孝：「士章第五」の「故以孝事君則忠。」による。

●不離：「諫爭章第十五」の「士有爭友、則身不離於

令名」による。●進思：「事君章第十七」の「君子之

事上也、進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡。」

による。●義則：「諫爭章第十五」の「故當不義、則

子不可以不爭於父。」による。『藝文類聚』は、「不義則

争」に作る。●匡救：「事君章第十七」。「進思」を参照。●災害：「孝治章第八」の「是以天下和平、災害不生、禍亂不作。」による。●孝悌：通於：「應感第十六」の「孝悌之至、通於神明、光于四海、無所不通。」による。

《孝》によって主君に仕えたならば、よい評判がその身から離れることはない。進み出ては眞心を盡くすことを思い、行いが正しければ、諫め争うことはない。主君の不善を正しやめさせれば、災いは生じない。父母に盡くし目上を敬う孝悌の教えを極めれば、その誠の思いは天地の神々にも通じるであろう。》

## 論語詩 二章

### 其一

守死善道、磨而不磷、直哉史魚、可謂大臣、  
見危授命、能致其身。

〔死を守りて道を善くす、磨けども磷<sup>うすら</sup>はず、直なるかな史魚、大臣と謂ふべし、危きを見て命を授け、能く其の身を致す。〕

●守死：「泰伯第八」の「篤信好學、守死善道、……天下有道則見、無道則隱。」による。●磨而：「陽貨

傳咸の「七經詩」について（矢田）

第十七」の「不曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、涅而不緇。」による。●直哉：「衛靈公第十五」の「直哉史魚、邦有道如矢、邦無道如矢。」による。●可謂：「先進第十一」の「仲由、冉求可謂大臣與。」による。●見危：「憲問第十四」の「見利思義、見危授命、……亦可以爲成人矣。」による。●能致：「學而第一」の「事君能致其身。」による。

《死に至ろうとも正しい道を行う。その節操は磨いても決して薄くなることはない。まっすぐな人だ、衛國の大夫であつた史魚は。すぐれた臣下と言えよう。危機を前にしては命を捧げ、その身を盡くして君主に仕えるのだ。》

### 其二

克己復禮、學優則仕、富貴在天、爲仁由己、  
以道事君、死而後已。

〔己に克ちて禮に復<sup>かへ</sup>り、學びて優なれば則ち仕ふ、富貴は天に在り、仁を爲すは己に由る、道を以て君に事へ、死して後ち己む。〕

●克己：「顔淵第十二」の「克己復禮爲仁。……爲仁由己而由人乎哉。」による。●學優：「子張第十九」の「仕而優則學、學而優則仕。」による。●富貴：「

## 中國詩文論叢 第二十三集

「顔淵第十二」の「死生有命、富貴在天。」による。●爲仁：「顔淵第十二」。「克己」を参照。●以道：「先進第十一」の「所謂大臣者、以道事君。」による。●

死而：「泰伯第八」の「仁以爲己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎。」による。

《我が身を慎んで規範に立ち返り、學んで余力があれば官に就く。富貴は天の定めるものだが、仁を行うのは自分しだいだ。道徳の教えを據り所として主君に仕え、その任務は死ぬまで續く。》

## 毛詩詩 二章

## 其一

無將大車、維塵冥冥、濟濟多士、文王以寧、  
顯允君子、大猷是經。

〔大車を將<sup>すす</sup>むる無かれ、維<sup>こ</sup>の塵 冥冥たり、濟濟たる多士、文王 以<sup>もつ</sup>て寧し、顯允なる君子、大猷 是れ經とせよ。〕

●無將・維塵：「小雅・無將大車」に見える。毛氏小序に「大夫悔將小人也」とある。●濟濟・文王：「大雅・文王」に見える。●顯允：「小雅・湛露」に見える。●大猷：「小雅・小旻」の「哀哉爲猶、匪先民是

程、匪大猶是經。」による。「猶」は、「猷」に同じ。はかりごと、の意。

《大きな荷車を押し進めるな。埃がもうもうとたちこめるから（つまりらぬ者を推挙するな。有能な人士の功徳を覆いかくしてしまうから）。威儀のすぐれた人士がたくさんいれば、文王も安心されるのだ。まことある君子よ、大いなるはかりごとを常とせよ。》

## 其二

聿脩厥徳、令終有俶、勉爾遐思、我言維服、  
盜言孔甘、其何能淑、讒人罔極、有覲面目。

〔厥<sup>そ</sup>の徳を聿<sup>の</sup>べ脩め、終わりを令<sup>よ</sup>くすれば俶たる有り、爾<sup>なんじ</sup>の遐思を勉めよ、我が言 維れ服せ、盜言<sup>はなは</sup> 孔だ甘し、其れ何ぞ能く淑<sup>よ</sup>からんや、讒人 極まること罔し、覲<sup>かん</sup>たる面目有り。〕

●聿脩：「大雅・文王」に見える。●令終：「大雅・既醉」に見える。●勉爾：「小雅・白駒」に見える。●我言：「大雅・板」に見える。●盜言：「小雅・巧言」に見える。●其何：「大雅・桑柔」に見える。●讒人：「小雅・青蠅」に見える。●有覲：「小雅・何人斯」に見える。

《先王の徳を述べ、自らもそれを修め、最後まで立派に生きたならば、厚く讃えられるであらう。君よ、しばらく官界から逃れよ。わたしの忠言に耳を傾けよ。よこしまな人の言葉は誘惑が多いが、よい言葉のはずがないではないか。讒言を言う人は盡きることはない。しかも我々と同じ人の顔をして現れるのだ。》

### 周易詩

卑以自牧、謙而益光、進德修業、既有典常、  
暉光日新、照于四方、小人勿用、君子道長。

〔卑くして以って自ら牧<sup>や</sup>ひ、謙にして益ます光る、徳に進み業を修むれば、既にして典常有り、暉光 日に新たにして、四方を照らす、小人 用ふること勿くんば、君子は 道 長ず。〕

●卑以<sup>ゝ</sup>：「謙」の「君子卑<sup>ゝ</sup>、以<sup>ゝ</sup>自牧也。」による。●謙而<sup>ゝ</sup>：「謙」の「謙尊而光、卑而不可踰。」による。『藝文類聚』は、「謙尊而光」に作る。●進德<sup>ゝ</sup>：「乾」の「君子進德脩業。忠信所以進德也、脩辭立其誠所以居業也。」による。●既有<sup>ゝ</sup>：「繫辭下傳」の「初率其辭而揆其方、既有典常。」による。●暉光<sup>ゝ</sup>：「大畜」の「大畜、剛健篤實、輝光日新其徳。」による。●照于<sup>ゝ</sup>：

傳咸の「七経詩」について（矢田）

「離」の「大人以繼明、照<sup>ゝ</sup>于四方。」による。●小人<sup>ゝ</sup>：「師」の「小人勿用、必亂邦也。」による。●君子<sup>ゝ</sup>：「泰」の「泰小往大來。……君子道長、小人道消。」による。

《君子は低い姿勢で自ら徳を養い、謙虚であってますます光り輝く。徳行を進んで行い功業を修めることに努めれば、そこには一定不變の法則がすでにあることに氣付くであらう。光り輝くその徳は日々新たになり、四方を照らし出す。小人を用いることさえなければ、君子の道はますます生長するのだ。》

### 周官詩 二章

#### 其一

惟王建國、設官分職、進賢興功、取諸易直、  
除其不蠲、無敢反側、以德詔爵、允臻其極。

〔惟れ王 國を建て、官を設けて職を分かち、賢を進めて功を興<sup>あ</sup>げ、諸<sup>これ</sup>を易直より取る、其の不蠲<sup>ふけん</sup>なるものを除き、敢<sup>まこと</sup>へて反側すること無し、徳を以って爵を詔<sup>さだ</sup>めれば、允は其の極に臻<sup>いた</sup>る。〕

●惟王<sup>ゝ</sup>設官<sup>ゝ</sup>：「天官・冢宰」「地官・司徒」「春官・宗伯」「夏官・司馬」「秋官・司寇」の「惟王建國、辨方

## 中國詩文論叢 第二十三集

正位、體國經野、設官分職、以爲民極。」による。●進賢：「夏官・大司馬」の「進賢興功、以作邦國。」による。●取諸：「冬官・輪人」の「無所取之、取諸易直也。」による。●除其：「天官・宮人」の「爲其井匭、除其不蠲、去其惡臭。」による。●無敢：「夏官・匡人」の「使無敢反側、以聽王命。」による。●以德：「夏官・司士」の「以德詔爵、以功詔祿。」による。●允臻：「冬官・輿氏」の「其銘曰、時文思索、允臻其極。」による。

《王は國を建て、官を設けて職を分けた。賢能の士を推舉し、功績のある者を用い、人材を心の穩やかでまっすぐな人の中から選び取った。清廉潔白でない者を除き、決して規範に背くことはなかった。徳によって爵位を授けたので、臣下のまことはその中心である王に集まったのである。》

## 其二

辨其可任、以告于正、掌其戒禁、治其政令、各修乃職、以聽王命。

〔其の任すべきを辨へ、以って正に告ぐ、其の戒禁を掌り、其の政令を治む、各おの乃が職を修め、以って王命

を聴け。〕

●辨其：「地官・鄉大夫」の「鄉大夫之職、各掌其鄉之政令戒禁、……以歲時、登其夫家之衆寡、辨其可任者。」による。「地官・鄉師」「地官・逐大夫」にも見える。●以告：「秋官・大司寇」の「士聽其辭、以告於上。」による。「上」は「正」に同じく、あるじ、おさ、の意。韻字の關係により改めたのであろう。ちなみに、『禮記』王制に、「成獄辭、史以獄成、告於正。」とある。●掌其：「地官・黨正」の「教其禮事、掌其戒禁。」による。「地官・肆長」にも見える。●治其：「地官・小司徒」の「小軍旅巡役、治其政令。」による。「地官・鄉師」「地官・縣正」「地官・里宰」「地官・稍人」にも見える。●各修：以聽：「天官・小宰」の「令于百官府曰、各脩乃職、……待乃事、以聽王命。」による。

《その任にふさわしい者を識別し、王に告げる。任ぜられた者は、赴任したところの戒律を管理し、政治を行うための法律を實行する。それぞれ自分の職務を修めて、王の命令を聞け。》

## 左傳詩 二章

## 其一

事君之禮、敢不盡情、敬奉德義、樹之風聲、昭德塞違、不殞其名、死而利國、以爲己榮。

〔君に事ふるの禮、敢へて情を盡くさざらん、敬みて德義を奉れば、之に風聲を樹つ、德を昭かにして違を塞がば、其の名を殞さず、死して國に利あらば、以て己が榮と爲す。〕

●事君：「文公十八年」の「先大夫臧文仲教行父事君之禮。」による。●敢不：「昭公十三年」の「昔耐也、得罪於晉君。自歸於魯君。微武子之賜、不至於今。……敢不盡情。」による。●敬奉：「宣公十五年」の「後之人或者將敬奉德義、以事神人、……」による。●樹之

：「文公六年」の「古之王者、知命之不長、是以竝建聖哲、樹之風聲。」による。●昭德：「桓公二年」の「君人者、將昭德塞違、以臨照百官、猶懼或失之。」による。●不殞：「文公十八年」の「此十六族也、世濟其美、不殞其名、以至於堯。」による。●死而：「僖公二十八年」の「榮季曰、死而利國、猶或爲之。」による。●以爲：「宣公十二年」の「而安人之亂、以爲己榮、何以豐財。」による。

《主君に仕えるための禮をわきまえている。どうして忠

傳咸の「七經詩」について（矢田）

情をつくさずにいられようか。臣が德義を重んずれば、主君は必ず引き立てて、民に風教を示されるのだ。德義を明らかに示して違反を絶ったならば、その名聲はいつまでも落ちることはない。死んで國に役立つならば、それを己の榮譽とみなすのだ。》

## 其二

茲心不爽、忠而能力、不爲利諂、古之遺直、咸黜不端、勿使能植。

〔茲の心爽はず、忠にして能く力む、利の爲に諂はざるは、古の遺直なり、咸な端しからざるを黜け、能く植ゑしむること勿かれ。〕

●茲心：「昭公元年」の「茲心不爽、而昏亂百度。」による。●忠而：「僖公二十三年」の「其從者肅而寬、忠而能力。」による。●不爲：「哀公十六年」の「勝曰、不爲利諂、不爲威惕。……」による。●古之：「昭公十四年」の「仲尼曰、叔向古之遺直也。」による。●咸黜：「昭公二十六年」の「則有晉鄭、咸黜不端、以綏定王家。」による。●勿使：「隱公六年」の「爲國家者見惡、如農夫之務去草焉。……絕其本根、勿使能殖。」による。「植」は、「殖」に同じ。ふえる、の意。

《二心を抱かず、まごころを盡くして努め勵む。利のためへつらうことなく、その眞っ直ぐさは古人の風格を傳えるものである。悪人どもをことごとく退けて、はびこらせないようにせねばならない。》

以上の通り、傳咸の七經詩は、それぞれ詩題に示された儒教の經典の中から、四字句のものは——若干の文字の異同はあるものの——そのままの形で、そうでないものは四字句に直した形で拾い出し、それらの句を集めて一篇の詩にしたものである。しかもそれらの句には、必ずしも原典の文脈とは關わりのない、いわば斷章取義的な形で拾い出されているものも多く見られる。まさに集句詩と稱されるゆえんである。

### 三、魏晉の官僚層とその教學

では、なぜ傳咸はこのような四言の詩を作ったのか。その意圖を考えてみる前に、後漢末から西晉に至るまでの、官僚の輩出母體であった知識人層と君主權力との關係について、渡邊義浩氏の説を参考に整理しておきたい。<sup>(4)</sup>傳咸の創作意圖を考える上で、有效な手續きだと思われるからである。

◆ 章帝期の白虎觀會議で儒教教義が定められ、儒教に基づく政策が推進されるようになり、儒教が官僚層の必須の教學となる。

◆ 桓帝期から靈帝期にかけて、宦官が政治の實權を握る。國政を「儒教國家」のあるべき姿に戻そうとする官僚と宦官とが激しく對立し、「黨錮の禁」が起る。

◆ 宦官と對決した黨人に與論の支持が集まる。これを機に、儒教を根底に据えた、君主權力とは別の自立的秩序、——後漢の官僚であることよりも、與論の名聲を重視する階層（渡邊氏は「名士」と呼ぶ）——が形成されていく。

◆ 曹操は、袁紹勢力と對抗するため、荀彧など豫州潁川「名士」の名聲に依據して、自らの勢力基盤を築いた。曹操は當初「名士」層の協力が必要とする立場にあった。

◆ 袁紹打倒以後、曹操は自らの君主權力の確立を目指し、「名士」との對立色を深めていく。「唯才主義」の人事を行い、さらには「名士」の儒教的價值基準に對抗するため、「文學」を宣揚し、「文學」的價值を基準とした人事を行った。

◆ 丁儀・丁廙・楊脩らが「文學」的價值基準により曹操を後繼者に推した。それに對し、「名士」層の多くは、



儒教的價值基準により長子の曹丕を支持した。

◆「名士」層の支持を得て、儒教理念に基づく禪讓によって即位した曹丕（文帝）は、「名士」層との協調關係により、政權を運用していくことになる。「天下爲公」（『禮記』禮運）という儒教の論理により、一族の政治關與を抑制し、また陳羣の意見を取り入れ、儒教（とりわけ「孝」）に基づく人物評價に人事基準を置く九品中正制度を採用することになった。これにより、君主權力に對する「名士」層の自立的秩序が保證されることになった。

◆明帝の死去後に政權を掌握した曹爽は、何晏や夏侯玄を登用し、「名士」の自立的秩序の抑制をはかり、君主權力の強大化を目指した。何晏は玄學に價值基準を置く人事を行い、夏侯玄は人事權を皇帝に直屬する尙書に回收することを目指した。

◆これに對して、「名士」出身の司馬懿は、州レベルの名聲を重視する州大中正の制を獻策して、「名士」層の支持を收斂していく。そして、正始の政變で曹爽一派を打倒し、政治の實權を手に入れる。これより以後、司馬氏は、「名士」の價值基準である儒教の、とりわけ「孝」を國家の文化的價值の根底に位置づけて國政を運用して

傳咸の「七經詩」について（矢田）

いくことになる。

以上、官僚の輩出母體について、後漢末から魏を経て西晉に至るまでの間に斷絶はなく、一貫して儒教を價值基準とする「名士」層がその主な擔い手であったことが確認されるのである\*。

※ 潁川の「名士」、鍾繇が曹操政權の基盤づくりに貢獻したのに對して、子の鍾會は、魏末において司馬昭の謀臣となり、司馬氏の政權の基盤づくりに貢獻したという事實は、その象徴的な例といえよう。

※ ただし、君主權力と「名士」層出身の官僚とは、必ずしも一枚岩というわけではなく、渡邊氏によれば、「名士」たちは、彼らが占有する文化的價值によって得た名聲を存立基盤として、常に君主權力からの自立を圖ろうとした、という。

では、彼ら「名士」たちは、具體的にどのような書籍を學んでいたのだろうか。それを知る資料として、『三國志』卷二十八「鍾會傳」裴松之注に引く、鍾會がその母のために作った傳記の以下の記述が挙げられよう。<sup>(5)</sup>

## 中國詩文論叢 第二十三集

夫人性矜嚴、明於教訓。……年四歲授『孝經』、七歲誦『論語』、八歲誦『詩』、十歲誦『尚書』、十一誦『易』、十二誦『春秋左傳』、『國語』、十三誦『周禮』、『禮記』、十四誦成侯『易記』、十五使入太學、問四方奇文異訓。

この記述によれば、鍾會は、十五歳で太學に入るまでに、母親の指導のもと、四歳で『孝經』を授けられ、七歳で『論語』を、八歳で『詩經』を、十歳で『尚書』を、十一歳で『易』を、十二歳で『春秋左氏傳』と『國語』を、十三歳で『周禮』と『禮記』を、十四歳で成侯（鍾繇の諡）の『易記』をそれぞれ暗唱していた、という。

ここで注目すべきは、傳咸が七經詩で取り上げた儒教の經典が、鍾會の學習内容と完全に合致しているという事實である。これにより、傳咸の七經詩は、當時の「名士」層の教學内容を反映したものであったと判断されるのである。

## 四、創作の背景および意圖

集句<sup>(6)</sup>という作詩法は、遊戲的性質を多分に備えたものといえる。また近年、魏晉六朝期の文學について、遊戲的側面

からの考察の必要性が指摘されている<sup>(7)</sup>。

しかし、傳咸の七經詩については、やはり何らかの政治的意圖のもとに作られた可能性の方が高いのではないかと思われる。というのも、先行の拙論においてすでに指摘してきたように、西晉期における四言詩の復興は、儒教理念に基づく西晉の政治方針を背景にしたものであり、傳咸こそは、それを積極的に推進した中心人物の一人と位置づけられるからである<sup>(8)</sup>。さらに、七經詩における傳咸の關心が主として以下の二つの事柄に向けられていることから、そのように考えられるのである。

- ①《主君に對する忠誠》——「以孝事君」「進思盡忠」「孝經詩」其二、「事君」能致其身」(『論語詩』其一)、「以道事君」(『論語詩』其二)、「事君之禮」(『左傳詩』其二)、「茲心不爽、忠而能力」(『左傳詩』其二)——。
- ②《人材登用の在り方》——「無將大車」(『毛詩詩』其一)、「小人勿用」(『周易詩』)、「進賢興功」「除其不蠲」(『周官詩』其一)、「辨其可任」(『周官詩』其二)、「咸黜不端」(『左傳詩』其二)——。

ではなぜ傳咸は、この二つの事柄を七經詩の中で繰り返して取り上げたのだろうか。その點については、『晉書』卷四十

七「傳咸傳」の以下の記述が手がりとなろう。

時朝廷寛弛、豪右放恣、交私請託、朝野溷淆。咸奏、  
免河南尹澹……兼河南尹何攀等、京都肅然、貴戚懾伏。

「名士」出身の司馬氏が「名士」層の支持を集めて樹立した政權、すなわち西晉においては、官僚は當然「名士」がそれを擔っていた。そしてさらに、「門地二品」や「上品に寒門無く、下品に勢族無し」という言葉に象徴されるように、そのうちの名門の家が高位高官を占めるようになり、貴族化していた。「豪右」とは、そのような貴族化した名門の家を指すと見てよからう。

この記述は、惠帝の元康年間の初め頃の状況を述べたものである。當時、朝廷の綱紀がゆるみ、貴族たちがほいままに振る舞い、「父ごも私かに請託」しあうなど、貴族層に対する朝廷の統率力が低下していたこと、逆に言えば、貴族層を中心に西晉朝廷への歸屬意識、忠誠心が、建國時に比べて、薄れていたことが窺えるであろう。

西晉貴族の放恣な振る舞いについては、實は武帝の太康年間の終わり頃から、すでにその兆候が見え始めていた。『晉

傳咸の「七經詩」について（矢田）

書』卷四十七「傳咸傳」には、太康年間の末頃、車騎司馬であつた傳咸が、世俗の奢侈の風潮について、武帝に上奏文を提出したという記述があり、また『世說新語』汰侈篇にも、人乳で育てた豚の蒸し肉で武帝をもてなしたという王濟の逸話が見えることから、それが窺えるであろう。

ではなぜ、こうした状況が生じたのか。その点については、やはり渡邊義浩氏の以下の指摘が参考となるであろう。<sup>10)</sup>

◆「名士」層は、荀彧との對決以降、「名士」と對峙的であつた曹室に對しては、本來の自立性を保つことができていた。しかし、「名士」出身の司馬氏が表面的には儒教に従つて國政を運用しながら權力を確立していく過程で、權力からの自立性を失いかけていた。そうした中で阮籍、および彼の思索の中で確立されていく玄學は、「名士」の存立基盤であつた文化的價值が、君主權力からの自立性を持ち續けるために大きな役割を果たす。

◆王朝に對する自立性を特徴とする貴族は、儒教を根底に据えながら、老莊思想・文學など様々な文化的價值を身につけていくことにより自立性を保持する。

つまり、儒教を價值基準の根底に据えながらも、それだけでは儒教國家を標榜する西晉の君主權力に對して、自立性を保つことができなくなつてしまつた西晉の「名士」たちは、玄學や文學など儒教以外の付加價値の部分にどれだけ精通しているかによつて、互いの名聲を競い合い、その新たな文化的價値を存立基盤として、西晉の君主權力からの自立性を保とうとした、というのである。

君主權力からの自立性をもつて、「名士」の特徴とするならば、「名士」——とりわけ貴族層——に對する西晉王朝の統率力の低下は、ある意味、必然的な趨勢であつたといえよう。ましてや、暗愚と稱される惠帝期においては、なおさらそれが加速されたことであろう。

また、西晉貴族たちが西晉の君主權力からの自立性を保つために、儒教以外の付加價値の部分に新たな文化的價値を求めたとするならば、それは當然、人材登用のあり方にも影響を及ぼしたことであろう。事實、九品中正制度において、「狀」と呼ばれる、任官希望者に郷品と共に與えられた人物調査書の記載内容が、魏と西晉とでは變化が見られるといふすなわち、魏では、德行・人柄・學問などがその主な内容であつたのに對して、西晉以降では老莊・玄學・談論・書畫・

音樂・容姿などの要素が多く記されるようになった、というのである。<sup>(1)</sup>

傅咸が七經詩の中で、「主君に對する忠誠」「人材登用の在り方」という二つの事柄にとりわけ關心を示し、繰り返しそれを詠いあげたのは、以上のような當時の狀況を憂慮してのことではなかつたか、と考えられるのである。

すなわち、儒教の經典の中から句を拾ひ集めて詩——しかも儒教の經典の一つである『詩經』に由來する四言の詩——を作り、先の二つの事柄を繰り返し詠うことで、儒教以外の付加價値の部分で西晉朝廷からの文化的精神的な自立を圖ろうとする「名士」——とりわけ貴族層——に對して、儒教一尊の精神に立ち返り、儒教國家を標榜する西晉朝廷への忠誠心、歸屬意識を再度高めるよう、警鐘を鳴らそうとした。それが傅咸における七經詩創作の意圖ではなかつたか、と考えられるのである。

## 五、結語

西晉文學の擔い手のほとんどが西晉朝廷の官僚でもあつたことについては、ほとんど異論がないであらう。しかし、西晉の官僚たちがみな、西晉朝廷に對して等し竝に忠誠心を抱

いていたかといえ、必ずしもそうではなかったようである。例えば、①「儒教一尊の立場から、儒教國家を標榜する西晉朝廷を支持し、忠誠を盡くそうとする者」もいれば、②「玄學など儒教以外の付加價値の部分に新たなる文化的價値を求め、それを基盤に西晉の君主權力からの自立性を保とうとする者」もいるなど、西晉朝廷に對する歸屬意識という點においては、官僚によって溫度差があったようである。

こうした溫度差は、當然、文學活動においても差となつて現れ出てくるのではないだろうか。<sup>\*</sup>

※「皇朝の司直」として官僚の不當行爲を容赦なく彈劾した傳咸、有職故實の權威として晉朝における禮制の見直しを任された摯虞などは、①に屬するであろう。一方、司馬氏の權力に最後まで自立性を貫こうとした阮籍の評價によって、官界に初めて名が知られるようになり、文學面においても『老子』の影響が多分に認められる張華<sup>(14)</sup>は、どちらかといえ、②のタイプに屬するであろう。

前者と後者は、「贈答」の分野における詩作活動という點で、鮮明な對照をなす。すなわち、——前者（傳咸と摯虞）は、武帝期において、君主權力を後盾に、この分野を中心に四言詩の復興を推進した。しかし、武帝

傳咸の「七經詩」について（矢田）

の死後、暗愚と稱される明帝が即位し、君主權力が低下するとともに、前者の活動は勢いを失う。それと同時に、愍懷太子の東宮を中心に、再び「贈答詩」が五言で作られるようになるのであるが、その中心的な役割を果たした人物として後者（張華）の存在が浮上する<sup>(15)</sup>。——というように。

もしそうだとすれば、西晉の文學を考えるにあたっては、その作者と西晉朝廷との關わり方の濃淡といった觀點からの考察もまた、必要とされるのではないだろうか。

## 【注】

- (1) 明・馮惟訥撰『古詩紀』卷三十二に、「春秋正義曰、傳咸七經詩、王羲之寫。然今所存者、六經耳。」とある。
- (2) 『古詩紀』に、「前四首、藝文類聚各分二章。此首藝文不載。以例考之、亦當爾也。」とある。『初學記』卷二十一は、分章せずに六首を収める。『藝文類聚』卷五十五は、「左傳詩」以外の五首を収め、「周易詩」以外の四首については二章に分けている。ここでは『古詩紀』の指摘に従い、二章に分けて解釋することにする。
- (3) 『初學記』『藝文類聚』『古詩紀』の諸本、いずれも「咸」

## 中國詩文論叢 第二十三集

に作るが、魯魚の誤りであろう。ここでは、『春秋左氏傳』によって、改めた。

- (4) 渡邊義浩著『三國政權の構造と「名士」』（汲古書院、二〇〇四年）を参照。また、渡邊義浩・田中靖彦著『三國志の舞臺』（山川出版社、二〇〇四年）「第一部 三國志の歴史」は、一般向けの啓蒙書として書かれたものだけに、この間の経緯が簡潔にまとめられており、分かりやすい。

- (5) 渡邊氏の注(4)前掲書により、この資料の存在を知った。

- (6) 明・楊慎は、傳咸の「七經詩」を集句詩の始まりと指摘し（本稿「一、序」を参照）、さらに續けて「或謂集句起於王安石、非也。」というが、集句詩が作詩における修辭の一つとして意識されるようになるのは、北宋の頃からであり、その盛行はやはり王安石によるところが大きいといえよう（『苕溪漁隱叢話』前集卷三十五「半山老人」を参照）。

- (7) 福井佳夫論文「六朝修辭主義文學の遊戲性をめぐって（上）（下）」『中京大學文學部紀要』第38卷第3・4號、第39卷第1號、二〇〇四年）を参照。

- (8) 拙論A「西晉「五言贈答詩」創作時期考」（『言語と文化』第四號、愛知大學語學教育研究室、二〇〇〇年）、拙論B「西晉傳咸經歴考」（『言語と文化』第六號、愛知大學語學教育研究室、二〇〇二年）、拙論C「傳咸と摯虞——その交流關係を中心に——」（『中國詩文論叢』第二十一集、中國詩文

研究會、二〇〇二年）を参照。

- (9) 『晉書』卷四十五「劉毅傳」に見える、劉毅が九品中正制度の八つの弊害を訴えた上奏文の中の言葉。

- (10) 渡邊氏の注(4)前掲書（四五八頁、四六二頁）。

- (11) 矢野主税論文「狀の研究」（『史學雜誌』第76編第2號、史學會、東京大學文學部、一九六七年）、および渡邊氏の注(4)前掲書（四二九頁）を参照。

- (12) 注(7)所掲の拙論Cを参照。

- (13) 『晉書』卷三十六「張華傳」に、以下のようにある。

初未知名、著「鷦鷯賦」以自寄。……陳留阮籍見之、歎曰、「王佐之才也」。由是聲名始著。

- (14) 佐竹保子著『西晉文學論——玄學の影と形似の曙——』（汲古書院、二〇〇二年）の第三章第一節「張華の文學に見られる『老子』の影」を参照。

- (15) 注(7)所掲の拙論Aを参照。